

## 会議結果報告書

1. 会議名 令和4年度 第4回 印西市環境推進市民会議（視察研修）
2. 日時 令和4年8月19日（金）9:30～16:00
3. 場所 八千代市ほたるの里、北総クルベジ
4. 出席委員:岩井会長、川井委員、小山委員、橋本委員、福井委員、吉村委員、渡辺委員  
事務局:環境保全課 岡本課長補佐、清田主査補
5. 傍聴者 2名
6. 配布資料
  - ・令和4年度印西市環境推進市民会議視察研修計画
7. 内容
  - 以下のとおり

視察先① 八千代市ほたるの里	
10:00 ～12:20	八千代市ほたるの里づくり実行委員会（以下、実行委員会）の金室会長、桑波田副会長、八千代市環境政策室の竹内主査、野島主任主事、平本主任技師の立会いのもと、現地視察及び意見交換を行った。
現地視察 (50分)	現地視察では、ほたるの里を一周しながら、湿地や樹木の状況と取組内容について説明いただいた。
意見交換 (70分)	意見交換においては、ほたるの里の成り立ちや概要についての説明や事前質問に対する回答をいただいた後、印西市内の市民活動団体による里山保全活動について、小山委員より説明していただいた。 現地視察と意見交換により伺った内容は以下のとおり。 <ul style="list-style-type: none"> <li>・ほたるの里は、かつて田んぼだったところを、平成7年から平成9年にかけて整備し完成した。学校にあるビオトープを大きくしたような場所である。</li> <li>・ほたるの里には誰でも自由に出入りしていただくことができるため、子供が自由研究のために訪れるなど、多くの市民に親しまれている。</li> <li>・グラウンドワーク方式により市民・企業・市の協働で管理・運営されており、月1回実行委員会の役員会が行われ、整備内容などについて市と情報共有を図っている。</li> <li>・維持管理について、水の入替や草刈りなどは実行委員会によるボランティアで行われており、市が光熱費の負担や草刈機の提供などの形で支援している。</li> <li>・ホタルについては、放流の翌年に自生が確認されたこともあったが、それ以降の継続に至っていないことから、里内湿地での自生に向けて取り組</li> </ul>

	<p>んでいるところである。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・ホタルの種類はヘイケボタルであり、餌となる巻貝が育つ環境を作ることも重要と考える。また、アメリカザリガニが大量に発生しており、大量に駆除を行っている。</li> <li>・6月下旬から8月にかけては役員がホタルの調査を行っており、その際にアカガエルなどその他の生き物調査も行っている。</li> <li>・ホタルをはじめとした多様な生態系の保全のため、市民・企業・市が協働により取り組む事例として環境省から評価され、「生物多様性保全上重要な里地里山」に選定された。</li> <li>・隣接する道路は交通量が多く、ホタルの生息環境保全のための接道部の植樹を企業から支援していただいた。</li> <li>・八千代市の里山は以前よりだいぶ数が減ってしまっており、自然を壊してしまうと元に戻すには大変な費用が掛かるとともに、元に戻るとは限らないため、今ある自然を守っていくことが大切である。</li> </ul>
<p>視察先② 北総クルベジ</p>	
<p>13:50 ～15:20</p> <p>講義 (40分)</p> <p>実演 (50分)</p>	<p>北総クルベジ事務局の喜屋武事務局長より、取組について講義していただいた後、炭焼きを実演していただいた。</p> <p>講義及び実演で伺った内容は以下のとおり。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・クルベジ=クールベジタブル（地球を冷やす野菜）という意味で、日本クルベジ協会の千葉県内の活動として、北総クルベジが取り組んでいる。</li> <li>・2050年カーボンニュートラルは、化石燃料を使わないようにするという考えで、台風の大規模化や40℃越えの気温は覚悟の上での目標であるが、バイオ炭の取組については、植物が吸収したCO<sub>2</sub>を貯留することでカーボンマイナス（CO<sub>2</sub>の純粋な削減）につながる。</li> <li>・CO<sub>2</sub>を吸収した植物は、燃やしたり地中に埋めると再度CO<sub>2</sub>が放出されてしまうが、炭にすることで一部の炭素を固定することができる。また、炭として農地にまくことで、肥料を効率良く吸収することにつながり、使用する肥料を削減（=微生物が肥料を分解する際に発生するCO<sub>2</sub>も削減）にもつながる。農水省が有機農業を推奨しているのは、脱炭素のためとも言える。</li> <li>・①里山保全などで生じた竹や枝を炭にする → ②炭を農家が買い取り農地で活用する → ③できた野菜が「地球を冷やす野菜」として市場に出る → ④一般市民が購入する → ⑤収益が里山保全の活動費につながる。という経済循環ができる。</li> <li>・バイオ炭のCO<sub>2</sub>削減量は理論上数値化が可能のため、クレジット化し、企業が買い取るという仕組みを活用できる（J-クレジット）。</li> </ul>

	<ul style="list-style-type: none"> <li>・千葉は里山が多く残されており、J-クレジットを作る資源が豊富にあるため、企業とのタイアップも可能と考える。</li> <li>・自治体の取組としては、大規模な密閉型炭化炉を設置するなどが考えられ、設備は高温のため、発電することも可能。</li> <li>・炭化の方法としては、地面に穴を掘って行う方法や炭化器を使う方法などがあり、CO<sub>2</sub>の固定については、林野庁による実証も行われている。</li> <li>・バイオ炭を活用した北総クルベジの取組は地域循環型の未来づくりを目指しており、以下のようなメリットがあると考えられる。             <ol style="list-style-type: none"> <li>①里山保全で生じる間伐材、竹、剪定枝を炭化することで、純粋なCO<sub>2</sub>削減につながる。</li> <li>②バイオ炭を農地に還元することで、土壌改良や肥料の吸着を良くし、野菜が美味しくなる。</li> <li>③バイオ炭を活用して生産された野菜を、地球を冷やす野菜としてブランド化することで、一般市民が気軽に温暖化対策に貢献できる。</li> <li>④学校給食などで取り扱うことで、子供たちに野菜が里山までつながっているということを認識してもらい、環境学習につながる。</li> <li>⑤J-クレジットを活用することで経済循環が生まれ、里山保全活動費の捻出につながる。</li> </ol> </li> </ul>
--	---

以上

令和4年度第4回印西市環境推進市民会議（視察研修）の会議録は事実と相違ないことを承認します。

令和4年9月16日

印西市環境推進市民会議 委員 小山 尚子

印西市環境推進市民会議 委員 橋本 千代子